

The Renaissance の「序文」について (2)

——Walter Pater の批評理論の研究 (3)——

内 田 義 郎

On the 'Preface' to *The Renaissance* (2)

——A Study of Walter Pater's Theory of Criticism (3)——

YOSHIRO UCHIDA

すでに述べたように、＜Pater は impressionistic criticism を提唱した＞という誤った通説は、＜Pater は aesthetic criticism を提唱した＞というもう一つの誤った通説とともに、'Preface' の第二節の不注意な読み方から生じているのである。もっとも、批評は批評者自身が美的対象から受けとった「印象」——Pater 自身の意味における——にもとづかねばならないということを明らかに述べるのが impressionistic criticism であるとするならば、Pater はまがうかたなき impressionistic critic なのであり、その限りにおいては、この通説も誤っていない。第二節で彼は批評のもつこの基本的性格を考察しているのである。

が、批評の基本的性格を説明するとき、Pater は奇妙な言葉をつけ加える。「これらの問い〔＝批評者が美的対象から受けとった「印象」についての問い〕に対する答えが、美の批評者がとり扱うべき根本的事実なのである。そして、光の研究、倫理の研究、数の研究におけると同様に、このような基礎的与件は、自分自身の実感としてとらえなければ入手できないものである。」前半には問題はない。後半も、「光の研究……におけると同様に」という副詞句を除くならば、問題とはならない。いずれも、批評の基本的な性格、あるいは、普遍的な条件を述べているだけだからである。問題はこの副詞句である。「印象」を自然科学の基礎的与件と同列に置くことである。ときどき予想外の語句を投入して読者に衝撃をあたえるのは、Pater の癖である。これもその一例にすぎないと解すべきであろうか？ それとも、批評における「印象」の重要性を強調するための単なる文飾にすぎないと解すべきであろうか？ が、Pater がこれに単なる文飾以上の意味をあたえていることは、これに続く第三節を読めば明らかになるのである。なお、Pater がこの第二節を、第一節のテーマである形而上学的美学の排除を主張する文で結んでいることに注目しておいてよいであろう。さて、これに続く第三節を引用してみよう。

したがって、美の批評者は、彼がとり扱うべきあらゆる対象を、すなわち、あらゆる芸術作品、および自然と人生の美しい形態を、快い感覚を生みだす力とみなし、その感覚はそれぞれ多少とも特殊であり、独得であると考え、彼はこの作用を感じとり、それを分析し、その構成要素に還元することによって、この作用を説明しようと望む。彼にとっては、絵画も、風景も、実人生にあるいは書物のなかに現われる興味深い人物も——たとえば、ラ・ジョコンダも、カララの丘も、ミランドラの **Pico** も——薬草やぶどう酒や宝石について言うのと同様に、その **virtues** のゆえに価値をもつのである。すなわち、そのおのおのがある特殊な、独自の、快い印象をわれわれにおよぼすという性質をもつがゆえに、価値をもつのである。われわれの自己形成は、このような印象に対する感受性が深さと多様性を増すにつれて、完全なものとなる。そして、美の批評者がなすべき仕事は次のことである。すなわち、絵画や、風景や、実人生にあるいは書物のなかに現われる美しい人物が、この特殊な美の印象、快楽の印象を生みだす **virtue** を識別し、これを分析し、これをその付属物から分離すること、この印象の源泉は何であるか、またいかなる条件のもとでこの印象が経験されるかをしめすこと、である。批評者がこの **virtue** を分離して、あたかも化学者がある自然的要素を記録するように、この **virtue** を自分自身のために、また他人のために記録しおわったとき、彼の目的は達せられるのである。そして、この目的に到達しようと望む人々が守るべき規則は、最近 **Sainte-Beuve** を批評したある人の次の言葉に、きわめて正確に述べられている：一美しいものを精細に知り、精緻なアマチュアとして、完全なヒューマニストとして美しいものによって自己自身を養い、かつこれにとどめること。⁽¹⁾

この第三節において、**Pater** は、彼が第二節で考察した批評の基本的性格にもとづいて、批評の方法についての一つの提案を提出している。そして、この批評の方法の提示によって、‘Preface’の批評理論は終わっているとみてもよい。第四、第五節はこの批評理論につけ加えられた注であり、解説であるとみなすこともできる。

第三節の批判的検討の準備作業として、原語のまま残しておいた ‘**virtue**’ という語の意味を考えてみよう。この語は、第二節ですでに用いられていたのであるが、多義的な意味をあたえられている。

(1) 第二節と第三節の前半においては、この語は ‘**influence**’ (作用) という意味で用いられている。この意味はさらに次のように細分される。(1a) 薬草、ぶどう酒、宝石の場合には、‘**efficacy**’ (薬効、効能) という意味。薬草の場合には、説明を要しないであろう。ぶどう酒の場合には、その ‘味’ という意味ではなく、‘酒は百薬の長’ などと言う場合の酒の薬効、効能の意味であろう。宝石の場合には、その ‘美しさ’ の意味ではなく、‘薬石の効’ などと言う場合の石の効、つまり薬効、効能の意味であろう。(1b) 美的対象の場合には、**Pater** 自身が言い換えているように、‘**effect**’ (効果) ‘**impression**’ (印象) という意味。よりくわしく言

えば、‘美的対象がその享受者におよぼす effect,’ ‘美的対象から享受者が受けとる impression’の意味である。

(2) 第三節の後半においては、‘virtue’ という語は少し違った意味で用いられている。つまり、‘influence (作用) の原因であるもの’ という意味で用いられている。それは、化学的分析の場合には、分離されて記録される ‘some natural element’ (ある自然的要素) であると説明されている。この第二の意味は、Pater が第五節で ‘the virtue in Wordsworth’s poetry’ を ‘the active principle in Wordsworth’s poetry’ と言い換えていることによって、さらに確認される。‘active principle’ とは、‘the active principle of the drug’ (薬の有効成分) などと言う場合のように、‘有効成分’ を意味する。(なお、この場合の ‘principle’ は ‘a component part,’ ‘an ingredient’ の意味である。)

以下の検討においては、‘virtue’ という語を、それぞれの場合にしながら、三つの別の語に翻訳することにする。すなわち、

(1a) の場合には、‘薬効’ (efficacy) に。

(1b) の場合には、‘効果’ (effect) に。

(2) の場合には、‘有効成分’ (active principle) に。

さて、第三節は、そのなかで少し遊離してみえる二つの、いずれも自己形成について述べている文——「われわれの自己形成は、……」という文と「そして、この目的に到達しようと望む人々が守るべき規則は、……」という文——を除くならば、美の批評の方法と、科学的研究(この場合の例では化学的研究)の方法の、基本的な同一性を主張している。すなわち、批評者が、美的対象から彼が受けとった「印象」——美的対象の‘効果’——を分析することによって、その‘有効成分’に到達する過程が、科学者が、薬草などの‘薬効’を分析することによって、その‘有効成分’に到達する過程に類比されうるものであることを主張している。ここには一つの推論が含まれている。(前提の一部は暗示的に述べられている。) この推論は次のように再構成されるであろう。

(前提1) 薬草の‘薬効’と美的対象の‘効果’は類比されうる。

(前提2) 薬草の‘薬効’を分析するならば、薬草の‘薬効’の‘有効成分’を知ることができる。

(結論) 美的対象の‘効果’を分析するならば、美的対象の‘効果’の‘有効成分’を知ることができる。

もしこの推論が正しければ、美の批評と経験科学的研究は、その方法に関しては、基本的に同一であるという Pater の主張は正当化されることになる。以下、この推論が正しいかどうか検討してみよう。

(1) まず<薬草の‘薬効’と美的対象の‘効果’は類比されうる>という(前提1)の検討から始めよう。Pater は、薬草と美的対象の両方に ‘virtue’ という一語を用いることによって(前提1)を主張しているのである。もちろん、薬草の‘薬効’と美的対象の‘効果’の類比

を主張することは、それ自体としては、真であるとも偽であるとも言えないのと同様、正しいとも誤っているとも言えない。この類比は、なんらかの推論と関連させられたとき、はじめて正しいとか誤っているとか言われうる。そして、目下の推論においては、それは明らかに誤っている。類比されている両者のあいだには、次のような本質的な——この推論にとっては本質的な——相違、つまり非類比性があるからである。

科学者にとっては、薬草の‘薬効’とは、その薬草を服用した患者の **overt** な行動の観察によって測定されうるものである。たとえば、解熱作用という‘薬効’は、患者の体温の変化の観察によって測定される。したがって、薬草の‘薬効’は、**Pater** の言葉とは反対に、それを研究する科学者が「自分自身の実感としてとらえなければ入手できないもの」ではないのである。この例で言えば、科学者は、体温計の水銀柱がしめす目盛りを観察し、ついでそのようにして測定された体温をグラフにとって、そのグラフがしめす変動を観察しさえすればよい。いや、その観察すらも自分自身でする必要はない。他人にその観察を委嘱してもよいのである。

一方、美的対象の‘効果’の方はどうであろうか？ 美的対象の‘効果’とは、**Pater** の定義によれば、「批評者自身が美的対象から受けとる印象」なのである。この定義によって、美的対象の‘効果’は、彼が正当に強調しているとおり、「自分自身の実感としてとらえなければ入手できないもの」なのである。

そして、薬草の‘薬効’と美的対象の‘効果’のあいだのこの非類比性は、目下の推論に本質的なかわりをもつ。つまり、＜薬草の‘薬効’と美的対象の‘効果’は類比されうる＞という（前提1）は誤りなのである。したがって、＜美的対象の‘効果’を分析するならば、美的対象の‘効果’の‘有効成分’を知ることができる＞という結論は正当化されえないのである。

（2） それでは、（前提1）で主張されている類比、薬草の‘薬効’と美的対象の‘効果’の類比が目下の推論において正しくなるように、美的対象の‘効果’を定義しなおすことはできないだろうか？ もちろん、それはできる。そして、その場合には、（前提1）は仮定によって正しいのだから（もっとも、（前提2）が真であるならばという条件はつくけれども）、＜美的対象の‘効果’を分析するならば、美的対象の‘効果’の‘有効成分’を知ることができる＞という（結論）は、文としては何の修正も受けることなく、正当化されうるのである。ただし、（結論）のなかの‘効果’という語の意味が、修正された定義にしたがって変わることは言うまでもない。

この条件をみたす定義の修正がどういうものになるかを考えてみよう。薬草の‘薬効’がどのように定義されているかに注目すればすぐわかるように、そのためには美的対象の‘効果’を‘美的対象を享受しつつある人間の **overt** な行動に現われる変化’によって定義しさえすればよいであろう。つまり、このような定義を受け入れることが、（前提1）の類比を正しいものにするための十分条件であろう。そして、このような定義をじっさいに考案することも可能であろう。たとえば、詩の‘効果’を‘詩の享受者が流す涙の量’によって定義し、音楽の‘効果’を‘音楽の享受者が発する拍手の音量’によって定義し、テレビ・ドラマの‘効果’を‘テ

レビ・ドラマの視聴率’によって定義するなどである。このように定義された美的対象の‘効果’が、薬草の‘薬効’とまったく同様に、観察によって測定されうるものであることは明らかであろう。そして、このような定義を受け入れるならば、＜薬草の‘薬効’と美的対象の‘効果’は類比されうる＞という（前提1）は正しくなるであろう。したがって、＜美的対象の‘効果’を分析するならば、美的対象の‘効果’の‘有効成分’を知ることができる＞という（結論）は正当化されるであろう。（もちろん、（前提2）が真であるならばという条件はつく。）つまり、美の批評と経験科学的研究は、その方法に関しては、基本的に同一であるという主張は正当化されるであろう。

しかしながら、このような定義の修正を受け入れるならば、美的対象の‘効果’は、Pater が美の批評の「基礎的与件」であると強調し、「自分自身の実感としてとらえなければ入手できないもの」とであると力説している「印象」とは、まったく別ものになってしまうであろう。いや、そればかりではない。美的対象の‘効果’にもとづく‘美の批評’は、批評者が美的対象から受けとった「印象」を排除することを要求するのである。

（3）次に、美的対象の‘効果’の定義の修正によって（前提1）が正しい前提になったと仮定して、＜薬草の‘薬効’を分析するならば、薬草の‘薬効’の‘有効成分’を知ることができる＞という（前提2）の検討に進もう。Pater 自身は、前提のなかのこの部分を暗示的にしか述べていない。そのなかに潜んでいる仮定を明示的に述べなおしたものが（前提2）である。まず、‘薬草の薬効の有効成分’という言葉そのものが奇妙であることに気づくであろう。‘薬効’とは、Pater 自身が言い換えているように、‘作用’（influence）なのである。‘物質’ではない。一方、‘有効成分’とは、彼によれば、‘自然的要素’（natural element）である。つまり、ある‘物質’の部分である‘物質’である。したがって、‘薬草の薬効の有効成分’という言葉は意味をなさないのである。そして、意味をなさない言葉を含んだ（前提2）は真でも偽でもありえず、無意味である。文法的には文と云いうるかもしれないが、命題ではない。つまり、前提ではない。前提ではない（前提2）を含んだこの推論は推論ではない。もちろん、（結論）は正当化されないのである。

（4）（前提2）が前提でありうるためには、これを次のように訂正しなくてはならない。＜薬草の‘薬効’を分析するならば、薬草の‘有効成分’を知ることができる＞と。この訂正された（前提2）は、たしかに有意義ではあるが、以下に述べるように偽である。つまり、事実的な誤りである。（さきに検討した（前提1）の誤りは論証上の誤りであった。）

もちろん、薬草の‘薬効’が分析できないと言うのではない。分析されうるけれども、この分析によっては、薬草の‘有効成分’を知ることができないと言うのである。たとえば、解熱作用という‘薬効’は分析されうる。これは生理学者の仕事であり、また今日では生化学者や生物学者の仕事であろう。その分析は、薬草が人体にひきおこす——あるいは人体が薬草に対してひきおこす——変化、つまり‘薬効’（ひとかたまりにとらえられている）を、その空間的・時間的細部に——たとえば細胞レベルでのいろいろな変化に——分けて理解することを

可能にするであろう。したがって、薬草の‘薬効’の分析はその‘薬効’の理解をたすけてくれるであろう。が、この分析は薬草の‘有効成分’を教えてくれないのである。微視的な、あるいは超微視的な変化も、巨視的な変化と同様に、‘有効成分’という物質ではありえないからである。

薬草の‘有効成分’を知るために必要なのは、薬草の‘薬効’の分析ではなく、薬草自体の分析である。が、薬草を分析することは、薬草の‘有効成分’を知るための十分条件ではない。薬草の分析は薬草のいろいろな‘成分’を教えてはくれるけれども、どの‘成分’が‘有効’であるかは教えてくれないからである。どの‘成分’が‘有効’であるかを知るためには、薬草およびそのいろいろな成分のいろいろな比率の混合物、の‘薬効’を観察し、測定する実験が必要なのである。そして、薬草の‘有効成分’は、これらの実験の結果から論理によって推定されるのである。

以上によって明らかのように、(前提2)は、このままでは無意味であり、また、これを有意味になるように訂正するならば、訂正された(前提2)は偽になる。したがって、＜美的対象の‘効果’を分析するならば、美的対象の‘効果’の‘有効成分’を知ることができる＞という(結論)も、これを(前提2)の訂正にしたがって訂正した＜美的対象の‘効果’を分析するならば、美的対象の‘有効成分’を知ることができる＞という(結論)も、ともに正当化されないのである。

(5) ここで、美の批評と経験科学的研究はその方法に関しては基本的に同一であるという Pater の夢の実現に、さらに同情してみよう。もし彼が(前提2)で有意味であるのみならず真である前提をたてていたならば、彼は(その結論として)‘美の批評’と経験科学的研究は、その方法に関しては、基本的に同一であると正当に主張することができたはずである。この、経験科学であることを保証されたはずの‘美の批評’がどういうものであるかは、(1)～(4)の検討からきわめて容易に推論されるであろう。ここでは結論を述べることにする。それは、(a)＜美的対象を分析すること＞と、(b)＜美的対象の‘効果’と、美的対象の変異体(＝美的対象のいろいろな成分のいろいろな比率による組み合わせ)の‘効果’を観察すること＞によって、美的対象の‘有効成分’を推定することを内容とする‘美の批評’である。(a)と(b)が具体的には何を意味するかを説明してみよう。

(a)＜美的対象を分析する＞とは、観・察・的・知・覚・的・対・象・と・し・て・の・美・的・対・象を分析すること、すなわち、美的対象をその観察可能な性質(＝美的対象の成分)に分解することである。この分析は知覚によっておこなわれるが、この場合の知覚は、知覚者に先在する記号体系によって情報に翻訳されるべき記号としての価値のみがあたえられているという特徴をもつ。それは、たとえば、‘ミロのヴィーナス’のいろいろな部分に物差しをあてて、その目盛りを観察することによってこれらの部分の寸法を知り、それらの寸法の比を算出することであり、Shakespeare のソネットに現われるおのおのの母音の出現回数を数えて、その相対頻度を算出するということである。

(b)＜美的対象の‘効果’を観察する＞とは、検討(2)から明らかなように、美的対象が刺激としてあたえられた人間に現われる反応、つまり行動を観察することである。それは、たとえば、Keats の詩の読者が流す涙の量を測定するということであり、Mozart の交響曲の聴衆が発する拍手の音量を測定するということである。また、＜美的対象の変異体の‘効果’を観察する＞とは、たとえば、‘モナ・リザ’にもとづいてさまざまなヴァリエーションをつくり、各々のヴァリエーションの前で享受者がたちどまる時間の長さを測定するということである。

つまり、この‘美の批評’は、美的対象の享受という現象から、次の二組の観察可能な性質のみを抽象することを、そしてその他の一切を捨象して、これに関心を向けないことを要求するのである。

(a) 美的対象自体の観察可能な性質。

(b) 美的対象が刺激としてあたえられた人間に現われる反応、つまり行動の観察可能な性質。

Pater がそれを「強烈に経験する」ことの必要を強調している「印象」、「自分自身の実感としてとらえなければ入手できないもの」であると力説している「印象」が、これら二組の性質のいずれにも入りこめないものであることは明らかであろう。「印象」は、この‘美の批評’においては、観察不可能なものとして排除されなければならないものなのである。



以上の批判的検討によって、Pater が第三節で提出している批評の方法がいくつかの誤りを含んでいることが明らかになった。また、批評の方法と経験科学研究の方法は基本的には同一であるという Pater の結論が正当化されるように、これらの誤りを修正するならば、‘批評’は、彼が第二節でその重要性を強調している「印象」そのものを、その対象領域から排除することを要求することも明らかになった。第二節で述べられている批評の基本的性格と、第三節で述べられている‘批評’の方法（修正された形での）は両立することができないのである。この点で彼の批評理論はまさに夢の特徴をそなえていると言えよう。われわれが経験によって知るように、夢においては、現実では両立しえない事象が調和的に結びつくものである。

が、もしわれわれが‘Preface’から首尾一貫した批評理論を抽出したいと望むならば、われわれは二者択一をせまられるのである。（択一しなければ、われわれ自身が夢を見なければならない。）これまで Pater の批評理論を論じたひとびとは、第三節を捨てて第二節を択んできた。これは妥当な択一であった。が、彼らは、第二節を不注意に読んだために、また「印象」(impression)という語を誤って解釈したために、さらに Pater の批評の基本的性格の説明を、批評における新しい方法の提案と思いがえたために、いわゆる‘impressionistic criticism’を創作してしまったのである。

‘Impressionistic criticism’という句は後世の発明である。Pater はこれを一度も用いなか

った。彼が用いたのは‘impression’という語である。彼はこの語を用いることによって、批評の基本的性格を説明したのである。すなわち、批評（＝批評という精神活動）は、批評者自身が対象から受けとった「印象」にもとづく精神活動であるということを明示したのである。彼は‘impressionistic criticism’という批評（＝批評文を書くという行為）における新しい方法を提唱したのではない。批評家が、彼自身が対象から受けとった「印象」を述べるという方法を提唱したのではない。もともと、Pater 自身の意味における「印象」は、‘述べる’つまり‘言葉に翻訳する’ことなどできないものなのである。それは経験することしかできないものである。彼自身の言葉で言えば、それは「強烈に経験する」ことしか、「自分自身の実感としてとらえる」ことしかできないものである。

Pater は、「印象」——彼自身の意味における——の翻訳不可能性をつねに強調した。‘Preface’の4年後の‘The School of Giorgione’において、彼は「印象」のこの翻訳不可能性をはっきりと認識することが、「あらゆる真の美の批評の第一歩」であると書く。

おのおのの芸術の感覚的素材は、いかなる他の芸術の形式にも翻訳不可能な、特殊な様態もしくは性質の美をあいともなうものであることを、すなわち、他の芸術の印象とは種類のまったくことになった印象をあいともなうものであることをはっきりと認識することが、あらゆる真の美の批評の第一歩である。⁽²⁾

したがって、「美の批評のなすべき任務」は、おのおのの芸術の作品において、「いかなる他の芸術の形式にも翻訳不可能な、その芸術に特殊な様態の美」に注目することである。たとえば、音楽の場合には、「美の批評のなすべき任務は……音楽においては、音楽美に注目すること、すなわち、音楽がわれわれに伝えられるその特殊な形式をはなれてはいかなる言葉も表わさず、いかなる感情的もしくは思想的 content も表わさない真の音楽美に注目することである。」⁽³⁾

Pater は、おのおのの芸術に固有な美の翻訳不可能性を見落すことを、「多くの通俗的な批評がおかす誤り」と呼んでいるが、そのなかでも特に、あらゆる芸術を詩の形式に、つまり言語に、翻訳してしまう誤りを重視する。たとえば、

さて、絵画の批評においては、上に述べた真理〔＝おのおのの芸術美は翻訳不可能であるという真理（内田注）〕をもっとも強調しなければならない。というのは、絵についての通俗的な批評においては、あらゆる芸術を一様に詩の形式に翻訳してしまうという誤りをもっともよく見受けられるからである。⁽⁴⁾

Impressionistic criticism の提唱者とされている Pater は、その誤りをもっとも深く認識していたのである。



最後に、夢の世界の背景、つまり発生を考えてみよう。発生という観点からみれば、しばしば、誤った説も正しい説におとらず興味深いものである。いや、ある意味では、より興味深い

と言いうであろう。というのは、誤った説は——その誤りがいくぶんか意識されている場合に特にみられるのであるが——精神の楽屋裏を想像させるという意味では、正しい説よりも興味深いものである。

‘Preface’の批評理論を書く7年前、Pater は ‘Coleridge’s Writings’ (1866)⁽⁵⁾を執筆した。この論文は、後年の他の論文においては、対象とする人物のうちから彼が共感し共鳴する面のみを抜きだしてこれを強調し、その他の面については口をとぎすという態度を守る Pater が、ここでは Coleridge の峻厳な批判者として現われているという点において、彼の全論文中の唯一の異例であり、また注目すべき論文である。この ‘Coleridge’s Writings’ において、Pater は、一連の排中の対立原理といえるようなものを用いたのだった。すなわち、

1. 「絶対的精神」対「相対的精神」(「相対的精神」とは、Pater にとっては「近代科学の精神」なのである。)
2. 「固定的原理」対「流動的現象」
3. 「総合」対「分析」
4. 「演繹」対「帰納」
5. 「形而上学」対「経験科学」

などの対立である。Pater によれば、これらの対立は基本的には同じ一つものものである。彼はおのおのの対立原理の後者の立場にたって、前者(その典型が Coleridge である)を厳しく批判したのだった。そして、批判を内容とする ‘Coleridge’s Writings’ においては、この観念の枠組みは成功をおさめたのだった。

それから7年後、かつての批判原理「相対的精神」にもとづいて批評理論を書きはじめた Pater の脳裏には、あの観念の枠組みがよみがえっていたと想像される。そして、この枠組みが、いっさいの「形而上学」を排して「現象」のみにもとづく批評理論を構想させ、さらにその「現象」に「分析」という名の方法を適用させ(ここで誤りが生じ、夢がはじまる)、かくしてできあがった全体を「経験科学」として提出させたと想像される。が、さきの検討で明らかのように、「経験科学」は「反形而上学」を含意するとは言えても、逆に「反形而上学」は「経験科学」を含意するとは言えないのである。

結局、‘Preface’の批評理論から理論としての価値によって生きつづけることができるのは、批評の哲学的基礎づけ(第一節)と、批評の基本的性格の説明(第二節)だけである。この生き残った理論は、‘批評’という語の定義に還元されうるとはいえ、大きな価値をもつ。また稀少でもある。現実との交換価値をもたぬさまざまな夢の集積である、現存の批評理論の全体においては、(Richards はもっと散文的に「ほとんどからっぽの穀倉」⁽⁶⁾と呼んだが、) ‘Preface’の批評理論の残りの部分は、現存の批評理論のほとんどすべてと同様に、一種の文学的価値あるいは詩的価値によって、夢としてよみがえることしかできないであろう。が、これはけっしへむなしいことではない。夢(の世界)は非現実であるとはいえ、現実の人間が現実に見

るのである。

注

- (1) Walter Pater: *The Renaissance* (Macmillan, 1st Ed. 1873, Library Ed. 1910), pp. ix-x.
- (2) *The Renaissance*, p. 130.
- (3) *The Renaissance*, p. 131.
- (4) *The Renaissance*, p. 131.
- (5) Edmund D. Jones (ed): *English Critical Essays (Nineteenth Century)* (Oxford U. P., 1916, Reset 1947), pp. 421-57.
- (6) I. A. Richards: *Principles of Literary Criticism* (Routledge, 1st Ed. 1924, Reset 1967), p. 2.

(昭和49年9月10日受理)